埼玉大学紀要　教育学部（教育科学），51（2）：73－95（2002）

鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理－歴史的背景

坂西　友秀*

キーワード：16世紀末、西洋人と黒人、日本人、心理－歴史的背景、人種ステレオタイプ

目次

はじめに

Ⅰ　日本人の西洋人観　－鎖国以前－
1 西洋人の種子島漂着
2 遣欧使節の見た世界の中の日本
3 手摑み・唾棄する野蛮な西洋人
4 礼節を欠く西洋人

Ⅱ　日本人の黒人観　－鎖国以前－
1 遣欧使節が語る「黒味を帯びた人々」
2 遣欧使節が語るアフリカ黒人
3 生殖上の原因に起因する肌の色
4 汚点・欠点としての黒い肌

Ⅲ　日本人の西洋人観と黒人観　－鎖国後－
1 大隅国種子島の西洋人
2 白石が聴取で得た世界の情報
3 長崎民衆と西洋人・黒人
4 丸山遊女の西洋人観・黒人観

Ⅳ　考察
1 日本人と西洋人の間の混血児
2 物珍しい西洋人
3 無礼・傲慢な西洋人と恐怖の奴隷商人
4 まとめ

*　埼玉大学教育学部教育心理学講座
**本研究は2000年度（平成12年度）および2001年度（平成13年度）科学研究費補助金（基盤研究C(2)）の交付を受け、研究課題「近代日本人の人種ステレオタイプの形成過程とマイノリティに対する現代的偏見の研究」の一部として行ったものである。

はじめに

16，17世紀の日本では日常人々が外国人に接することは皆無であった。それでも、わずかに海外貿易をしている港市や都に住む貴族、武士、商人、町人、一般の民衆はポルトガル人に接する機会があった。特に大村純忠（肥前大村）、大友義鎮（宗麟，豊後）、高山長房（右近，摂津）を初めとするキリシタン大名の領地に住む住民は、イエズス会の宣教師と接触したものも少なくない。宣教師たちが、日本を布教の地として活動した安土・桃山時代は、日本人がもっとも頻繁に西洋の人々、とりわけポルトガル人に接した最初の時期であった。

信長がキリスト教を厚く保護し、布教活動を援助したことは、ポルトガル人の日本への渡来と居住を可能にした最大の要因であった。イエズス会の宣教師が、毎年日本における布教活動の状況を克明に記してインドのゴアや本国の教会本部に送った「日本報告」こそ、最初期の日本人と西洋人の出会いを生き生きと描写している。当時日本人にとって、西洋人はきわめて珍しく、好奇の的であった。彼らが同伴していた黒人や「肌の黒い人」もまた日本人にとっては初めて見る対象だった。西欧諸国の大航海と植民地活動を背景にしたアジアへの進出が、東アジアでももっとも遠い東端の未知の島国日本とヨーロッパ諸国との出会いを生んだのである。

西洋との遭遇は、戦に明け暮れていた戦国武将にとっては、貿易上の関心を呼び起こすことはあっても、彼らの日本中心の世界観を変え、全国統一を目指すその野望を乱すほど重要な政治上の問題になることはなかった。イエズス会宣教師の日本報告書を分析した限りでは、16，17世紀の日本

人一般には、白人や黒人に対する驚きや好奇心はあったものの、定型化された白人観、黒人観、黄色人観は形成されていなかったと考えられる[4]。

豊臣秀吉は、武士や一般庶民の間のキリスト教信仰は容認したが、1587年に次のような外国人宣教師追放令を出し、キリスト教布教を禁止した。「一　日本ハ神国たる処、きりしたん国より邪法を授候儀、太以不可然候事……　一　……伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日之間ニ用意仕可帰国候、其中に下々伴天連に不謂族申懸もの在之ハ、曲事たるへき事　……　天正十五年六月十九日」[12]。

さらに、徳川家康は、1635年にすべての日本船の海外渡航を禁じた。1637年から1638年には島原の乱が起き、平定後外国人に対する対応をますます厳しくした。「……自今以後、かれうた渡海之儀被停止之畢、此上若差渡にをひてハ、破却其船、幷乗来者悉可処斬罪之旨所被　仰出、仍執達如件」[12]。こうして1639年にポルトガル船の日本への来航を禁止した。1641年にはオランダ商館を長崎の出島に転出させた[11]（図１）。オランダは、出島移転に先立つ1614年に平戸で貿易を開始していた。

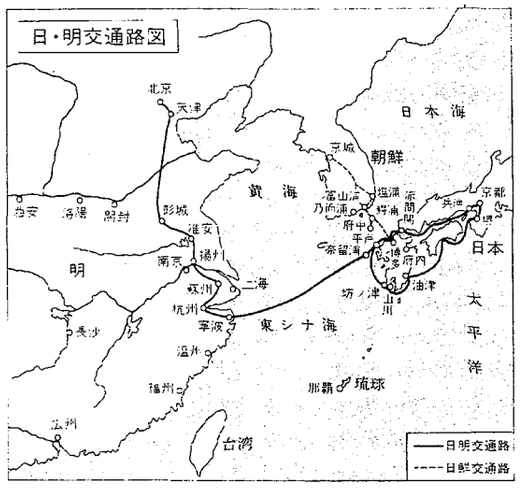

図１　明（1368－1644）と日本の交通路この時期平戸は交通の要所になっていた（家永三郎，1977より引用）

江戸幕府は、交易を長崎の出島に限り、海外との交流を一切禁止する鎖国政策を実施するに至った。一方、1613年にキリシタン禁教令を出し、キリスト教信仰を全面的に禁止した。信仰心の厚かった高山右近は、家康により1614年にマニラに追放されている。安土・桃山時代まで盛んに行われてきたポルトガルとの交易と、信長の庇護の下ポルトガル人宣教師たちが日本人の間で行った活発な布教活動は、西洋人と日本人の接触もたらしてきた。こうした日本と西洋の交流も江戸時代に入り、ほぼ完全に遮断されたのである。日本人の海外渡航も海外からの異人の来航も一切禁止された江戸時代、一般民衆に限らず武士、貿易商人においても西洋人と接する機会は全くなくなった。海外の事情は、ただ出島を通じて、それも交易を許されたオランダ人を介して細々と伝えられるにすぎなくなった。しかし、海外から隔絶された環境にありながら、西洋の事情に強い関心を示す人もいた。杉田玄白や新井白石はその代表である。

外国船が日本近海に現れ、乗員が日本に上陸することもまれにはあった。その際の取り調べの記録には、事情聴取する役人側が海外および異人に対し津々たる興味をもって臨んだ様子がよく記されている。

幕末にいたり、諸外国から通商を迫られるまでの間、ヨーロッパとの交流のなかったほとんどの日本人は、西洋人に対する人種的ステレオタイプをもっていなかったと考えられる。本稿では、外国人、とくに西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプ形成の心理－歴史的背景を、16世紀中頃外国船が種子島に漂着した頃から、鎖国体制に入った江戸時代中期頃までの時期に焦点を当てて検討する。

Ⅰ　日本人の西洋人観　－鎖国以前－

1　西洋人の種子島漂着

日本人が初めて西洋の人を見たのは1543年（天文12年）のことだ（南蛮船は、1020年に薩州へ来たが撃却し、1408年には足利義持に孔雀、鸚鵡、黒象種々貢し、1412年にも入貢したという）[27]。イエズス会のフランシスコ・ザビエルの日本訪問の６年前になる。種子島のもっとも南に位置する西之村の沖合に大きな船が現れた。船から何人かの異人が上陸したが、姿、形、話す言葉も日本人とは全く異なり、意志疎通に苦労した。上陸した船客の中にはポルトガル人３人が含まれていた。言葉は通じなかったが、明国の五峰という人がいたので、漢文に通暁していた織部丞時貫が砂浜に漢文体で話す内容を書くことによって問答を成り立たせたという。乗員の中にはピントという東アジアに関心を持つポルトガル人がいたともいわれる。ピントらは、揚子江を下って海上に出、東南に向けて進んだが、途中海賊と戦うなど苦難に遭遇した。「船は三日二晩、荒れ狂う生死の海をのたうちまわった。…八月二十五日の早暁、低い島影の南の端に近く、丸腰の錨をおろした。…小舟がおろされた。…向かっている島が種子島とは誰も知るよしがなかった」[9]。ピント[18]によればこうである。船が破損したまま航海を続けていると、陸から強烈な大嵐が襲いかかり、陸地を見失ってしまった。追い風に乗って、琉球の島に避難せざるを得なかった。ミアイジマという大きな集落近くまで地元の丸木舟に乗った男たちに案内され投錨した。「投錨後二時間もせぬうちに、種子島の王ナウタキンが、大勢の商人と貴人を従え、交易用の銀をいっぱい詰め込んだ多数の箱を携えて…ジャンク船に来た。…私たち三人のポルトガル人を見ると、この三人は何者かと尋ねた。顔立ちが違っているのと、鬚を生やしているところから、シナ人ではないことに気付いたからである」。この時ジャンク船の持ち主であるシナ人船長との会話の通訳を務めたのは琉球女だったという。島王ナウタキンは船をくまなく見てまわり、「私たちについて知りたいと思う詳細な点を幾つか質問した。…彼は私たちとの会話で多くの時間を費やし、あらゆる質問において好奇心に富んだ新奇を好む人であることを示した」。ピントらは、「翌日、夜が明けると、上陸し私たち三人全員と、風采重々しく権威のありそうに思われた十ないし十二人のシナ人を連れていった」。島王の邸で商品の売買を行った。ナウタキンはポルトガル人三人に強い関心を示し、「船長とその部下全員を退らせると、その夜は陸の自分のもとに残って貰いたいと言った。なぜなら、自分が大いに知りたいと思っている世界のさまざまなことについて、まだ充分質問していないからである」。日本の人々はみな生来大変親切で愛想がよいとピントは書いている。

彼らは、種子島を訪れた豊後の王からの使者に会い、豊後訪問を要請された。豊後の王の手紙が紹介されているが、そこには風聞による日本人以外の人種についての言及があり、興味深い。「…そなた（種子島王）の町には、世界の果ての天竺人が三人いて、彼等は…外部にある世界のあらゆることについてそなたにたくさんの情報を提供し、この我らの国よりもずっと大きな、我らの判断では信じられないことではあるが、黒人や褐色人の住む土地があると述べている」。彼らは豊後の王の依頼を受け、彼地を訪問し、鉄砲を伝えたと書いている。王の寵愛する16，17歳の少年が火縄銃を撃ったとき、火薬の量を間違え銃が破裂し、右手の親指がちぎれるほどのけがを負った。「一緒にいた二人は宮殿に向かって逃げ出し、みちみち『外国人の鉄砲が王の子を殺した』と叫んでいった。その声で人々の間に大騒動が持ち上がり、町中大混乱となり、人々は哀れな私のいる家に武器を持ち大きな叫び声を上げながら駆けつけて来た」。住民との密度の濃い交流、意志疎通がさしたることばの支障もなく行われたかのようにも読みとれる。しかし、漂着した船がピントらを乗せたものだったのか否か確たる証拠はない。当時の日本の記録と食い違うところもある。ここでは、ピントについては岡村の見解に従うことにする。「事実を書いた旅行記というよりも、荒唐無稽な冒険譚とみなされ、…ピントは大嘘つきの代名詞として通っていた。…最近では、『遍歴記』は事実とフィクションとを巧みに織りまぜた文学作品であるということに研究者の意見はほぼ一致しており、大航海時代の側面史としての価値もさることながら、純粋な文学作品として評価しようとする方向が見られる」[17]。ピントの記録に部分的に真実は含まれていると考えられる。

日本の記録を見よう。「西の村浦に一大船来す。何れの国より来たれるかを知らず。其の人、形類せず、語通ぜず、見る者以て奇怪と為す。西ノ村

の宰に西村織部丞時貫という者あり、杖を以て沙上に書して云う『知らず船客何れの国の人なりや』と。大明の儒生五峰という者あり、書して云う『是れ南蛮種の賈人なり、怪しむべき者にあらず』と。即ち時貫、人を遣わして恵時に告げしむ。群臣に命じ、軽舟をして之を曳かしむ。二十七日、舟を赤尾木の津に入る。賈胡の長二人あり、一を牟良叔舎と曰い、一を貴利志多陀盂太という…」(9)(10)（種子島家譜の第二巻、天文十二年八月二十五日）。薩摩の禅僧南浦文之は、後にこの事件を「鉄砲記」として再録していて、当時の事情を知ることができる。それによれば、舟には「船客百餘人」とあり、大勢乗り組んでいた。「船中の客、何れの國の人なるを知らず、なんぞその形のことなるや」。容姿外貌が日本人と大きく異なり、その理由を問うている。五峰答えて曰く、「此は是西南蠻種の賈胡なり、ほゞ君臣の義を知ると雖も、未だ禮貌その中に在るを知らず、この故に、その飲むや杯飲して杯せず、その食するや手食して箸せず、徒に嗜欲のその情に愜ふを知りて、文学のその理に通ずるを知らざるなり」。怪しい者ではないが、礼儀を知らず、手で飲食をする野蛮人であると記している。同家譜には、「天文十三年甲辰春。南蠻船漂來于熊野浦。…」と記され、翌年にも南蛮船が来航したことがわかる。外見が日本人と大きく異なり、文化や慣習の違う南蛮人を目の当たりにして、住民はどのような思いを抱いたのであろうか。先入観も何もなく驚きだけが先行していたのではないだろうか。

その後、日本人の西洋人との接触は、ザビエルをはじめとするイエズス会宣教師の布教活動を待つことになる。1582年（天正10年）にキリシタン大名（大村、有馬、大友）は、4人の天正遣欧使節（伊藤マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン）を西欧に送り出した。彼らは1590年に帰国し、西欧各国での8年間に及ぶ見聞を口述し記録した。彼らの回顧録には、当時の日本人が西洋人、とりわけポルトガル人に対して感じていた印象が記載されており、前述の種子島島民を初め、日本人が出会った西洋人に対して抱いた印象を探る手がかりを与えてくれる貴重な資料である。

2　遣欧使節の見た世界の中の日本

天正の遣欧使節は、帰国後ヨーロッパの実情をつぶさに藩に知らせ、日本は世界の中の一小国であることを教える重要な契機になった。千々石ミゲルは、1590年10月4日付けでエーヴォラの大司教ドン・テオトニオ宛に帰国事情を書いた書簡を送っている。「七月二十一日に長崎港に着きました。一行はキリシタン信徒一同の、とりわけ母親、友人たちの筆舌に尽くし難い歓喜、歓呼をもって迎えられました。…異教徒自らが、私たちの幸運な上陸に、皆目をみはり感嘆して出迎えるほどでした」(14)。少年使節は巡察師に同行し秀吉に謁見している。「関白殿の巡察師様招聘に際しては、私たちも同行しました。私たちがこの目で数々見てきた感嘆すべきヨーロッパ事情、なかんずくデウス様の礼拝に関する事柄を話す機会が設けられ、人々がそれを聞き入れてくれたならば、…不信仰から信仰への道が容易に拓けるであろうと、確信しています」(14)。巡察師ヴァリニャーノ一行は、謁見のために上京する途中でヨーロッパ事情を諸侯に説き広めている。「室に滞在しているときに、…多くの諸侯が、ヨーロッパの事情を聞こうと好奇心に魅せられて、この地で巡察師、四名の日本の公子（伊藤マンショら）やポルトガル人に逢って種々の話を非常に興味深く聞いた。一行は、携帯していた世界地図について、とりわけシナで描かれた大きい図柄の精巧に描かれたイタリアの図を見せ…ローマについて説明した。…時計、全園儀（アストロラビヨ）、および非常に珍しい書物など、イタリアから持ち帰った品々を見せたので、皆は驚嘆し仰天した」(14)。

秀吉は、インド副王の使者として巡察師に会う事を許した。このときの一行の行列は豪華絢爛で、見物した人々を驚かせた。一行と会った秀吉は、ことさら「（伊藤）ドン・マンショとは相当長らく留まって（話を交わし）、非常な愛情といつくしみを示した。そして、「もし」汝自らが政庁に留まることを望むなら、汝に多くの職務を与えようから、留まってはどうか」(14) と勧告してやまなかった（一五九二年十月一日付、イエズス会総長宛のルイス・フロイス一五九一、一五九二年度・日本年報）。彼らにヨーロッパで学んだ音楽

をシンバル、その他の弦楽器で繰り返し演奏させ、彼らが日本人であることを喜んだという。自らの体験としてヨーロッパの様子を語り、珍しい物を提示する使節の聴衆に与えた影響は大きかった。

「みずから日本人がヨーロッパに赴き、日本人としてヨーロッパを見てその見聞の成果が記されたものは、きわめて少ない。本書はこの、きわめて少ないものの一つであり、しかも十六世紀の見聞録としてそのもっとも古いものであるばかりでなく、またもっとも詳細なものであり、しかもその見聞者たちの恵まれた資格と環境によって、ふつう一般の旅行者ばかりか、特別の資格を持つ国家使節もまた今日でさえ、うかがい知ることのできないところに参入し、許されることの少ない特別の盛儀に参列している」(5)。使節となった4人の少年は12，13歳の若さであり、柔軟に西洋の文化を取り入れ、日本の文化、慣習と西洋のそれらとの違いをよく理解していた。このことが、当時の日本人がもっていた西洋人観と、彼らの西洋における現実の経験や印象とを比較することを可能にした。彼らは、日本と西洋の違いを明確に意識して西欧を語っていて当時の日本人の日本および世界の認識のし方、西洋人観を知る上で有意義な資料になっている。記録は、イエズス会の信者である日本人レオとリノが少年使節4人に西洋に関する疑問を尋ね、4人がそれに対して答え説明するといった形式で進められた。「レオとリノはかつて日本を出しことなき者にして、西洋の事情につきてはなおいまだ知るところなく、もっぱら他の4人（マンショ、ミゲル、マルチノ、ジュリアン）ーかくも多くの知識を獲て帰来せし四人に各般の事情を問い質すべきもの」(5) とされ、世界を全く知らなかった日本人が西洋人をどのようにとらえたらよいのかを問いかけていて興味深い。

ヨーロッパはどこにあるのかとの質問にミゲルは次のように答えている。「われわれ日本人は、たとえていえば、まったくよその世界とでもいうべきかのヨーロッパの土地からもっとも遠く離れたこの島々に住んでいて、われわれはこれら『遠国』の人々とは交易や事物の交渉がはなはだ少なかった。このため今までわれわれは日本のほかに、ただシナやシャムなどの近隣の国々のことしか知らず、またわかってもいなかった。これ以外には『ナンバンジン』（南蛮人）、すなわち南方の人々の国々について、…わずかに曖昧な噂のようなものが伝えられているのみであった。こうした遠い国々のことをわれわれは『ナンバン』と呼び、シナの人々は『ナンファン』、すなわち南の方面と呼んでいる」(5)。世界は広大であり、日本人が知っているシナやシャムは全世界の多くの国々の中の極一部にすぎないこと、世界はヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカ、および未知の土地と呼んでいる大陸からなっていることを説いている。地球上には広大な大陸がいくつも広がり、日本はごく小さな島国にすぎないことを知る日本人はこの頃ほとんどいなかった。地球、全世界の地図・地理を知ったレオとリノの驚きはわれわれの想像以上に大きかったに違いない。

3　手摑み・唾棄する野蛮な西洋人

日本に来た宣教師は、容貌や服装が日本人と全く異なり異形の人として受けとめられた。「彼らの服装や暮らし方ばかりを見て、…外面的な徴証に従って日本人たちはパドレ方の伝えられる方というものの中には、下等な生活様式も含まれているというような判断、というよりは臆断を下し、その他種々の疑惑に陥っていた」(5) とミゲルは指摘し、表面的な瑣事にとらわれる日本人の西洋人観は否定的すぎると語っている。

日本人が西洋人、即ちポルトガル人を野蛮人と見なす理由についての彼らの問答が興味深い。最初期における日本人の西洋人観形成の過程を知る手がかりになると思われるので、長くなるが丁寧に見ておくことにする。リノは、ヨーロッパ人は床の上に直に座らず、椅子に座るというが、それでは礼節を重んじ、お互いに優雅の徳を示し合うことができないのではないか、西洋人は優雅さなど一顧だにしないのではないか、と疑問を呈した。それに対し、ミゲルは、ヨーロッパには優雅の徳も、種々の考慮も規範も存在し、その遵守の仕方が日本と異なるだけだと答えている。「寝る方式が大いに異なっているし、衣食いっさいの方式もずいぶんと違うのだから、礼儀作法の教えもまた

大いに異なっているのも不思議はない。われわれはそれに馴れないものだから、日本へ来るポルトガル人を野蛮人扱いにし、人としての教養に欠けていると考えるのである」(5)、と答えている。

ポルトガル人が日本人に野蛮人としてみられた理由は、両者の文化の違いに大きな原因があった。宣教師の最高監督者であった巡察師ヴァリニャーノも両文化の食い違いを指摘している。「我等は相手に敬意を払うには帽子をとって立ち上がるが、彼等は反対に履き物を脱いで坐るのであり、立って誰かを迎えることは、はなはだしく無礼であると考えられている」「そうしなければ、我等は野蛮人であり、育ちが悪い者と思われる」(2)。文化の違いから生まれた西洋人の振る舞いに対する日本人の違和感、嫌悪感は、「文明開化」が行われ西洋文化一色に染まる明治期にもそのままあてはまる点で重要である。この点については、稿を改めて論ずることにしたい。

レオはなおも問う。「といっても、あんなに理法にはずれたことばかりする者どもを、どうして野蛮人と思わずにいられようか。実際彼らは靴も脱がず、脛当（脚絆）もとらずに、お寺に上がりこんで、いや、そこでところ嫌わずやたらに唾は吐くし、痰は飛ばすし、われわれの使っている畳・蓆を、遠慮会釈もなしに穢すし汚すし、その他、人としての教養をまったく欠くと思われるこの種のことをなして憚らないのである」(5)。ミゲルは答える。「それは決して無作法からのことではなく、むしろひとえに、恭謙・優雅に振舞うことについての彼らの教えや定めが、われわれのものとは違うところから生じることに違いない。ポルトガル人の言語を知らないわれわれが、彼らの人々の話しぶりをいかにも野蛮と思い、同様にまた日本語にたけていないポルトガル人たちが日本人のわれわれをいかにも野鄙で、正しく話をする術も知らない人間と判断するのと同じように、優雅の徳といっても、その考え方、行き方は、みな銘々に違うのだから、おたがいに相手を野鄙だの、無骨だのと思うことになるのだ。だから今のお寺の中で、あんまり礼儀があるとはみえないという話にしたところで、あの人々の坐り方の習慣を考えてやれば、あなたにしてもそうはお考えにならないであろう。なにしろあの人々は椅子に坐る人たちで、われわれのように藁でつくった蓆は用いず、床はすべて石なので、だから土地の上に痰唾を吐くのは、かの人々にしては、それほど不作法でもないことになるのだ。特に元来、あの人たちは、この点では慎み深く遠慮深い人々で、出る痰などは一般に手巾で拭き取っているくらいだから」(5)。

さらに、「物の自然に即して考えてみても、ヨーロッパ風に椅子に坐る方がずっと適当だ。椅子を使えばある種の威厳を保ちながら、無駄なく体を休めることができる。じかに床に座るのは、へたばったように見えるばかりでなく、辛く面倒で耐え難いことだ」(5)。ミゲルのこの言葉に対して、「あんな坐り方があなた方にそれほどお気に召すとは、あなた方は日本人としての生まれをまったく失って、ヨーロッパ生まれの人間になってしまったように思われる」(5) と語り、レオは少年使節が日本人としての本質とアイデンティティを失ってしまったことに驚きを示した。なおもミゲルはつけ加える。「他の民族の習慣に注意を払う段になると、われわれの坐り方は、なお分が悪い。ヨーロッパを除けば相当に洗練された優雅さをそなえているのは、シナ人くらいのもので、あとはまったく未開のものたちばかりだが、そのシナ人はヨーロッパ人のように椅子に坐っているが、その他すべての未開の民族は、床の上に直接に座るのを、われわれは見て来た」(5)。こう言いながらも、ミゲルは習慣の違いの問題であり、この種の論争は意味がないといなしている。

4　礼節を欠く西洋人

レオは重ねて尋ねた。「われわれとして怪訝に堪えないのは、商用で日本へ来るポルトガル人たちの生活の仕方や、処理の仕方が、どうもお話とはずいぶん違うように見えることだ。事実、彼らはその食卓で清潔の規範を守っているようには思われないし、食べるものにも選択をせず、われわれとしてはとても食べられたものではないのに手当たり次第に牛肉であれ豚肉であれ、そのほかそうした肉類をやたらに食べるばかりか、箸も使わず、いきなり手摑みに取り扱って何とも醜いばかりか、そのほかにもこの種のことを常に行なって一向意に介せず、われわれの性質や習慣からは、とてもやりきれないことをする。そのうえ、彼らは、食卓の用に、エチオピア人らしい人間たちや、そのほかとても人間としての洗練にはまったく縁がなさそうな色の黒い人間を侍らせているのをわれわれは見ているのだ」(5)。

この疑問に対して、貿易商人、船乗りの不躾、粗暴さと同様に、日本に派遣される宣教師の質が彼らの行動に反映している、とミゲルは返答している。「日本人がその不審を心に抱くのも無理はない。そういう人たちは何分、まだ日本を離れたことのない人たちなのだから。しかも、当然、君が抱くような意見をその人たちに持たせる原因もいくつか、ないとはいえない。今までふつうの日本人が知ってきたのは、日本へ来るポルトガル人ばかりだから、日本人はこの種の人たちから推して一般にそのほかの人々についての判断をつくり、すべての者を同じ尺度で計っているのだが、しかし、それは事実から非常にはずれている。というのは、日本へそういう人々は、船主や少数の商人を除けば、たいていは商人の手代であって、こうした人間は、洗練された教養に親しんだことがあまりない連中だから、自然都雅の美徳に反する咎めを受ける過ちに陥るようなこともするだろう。のみならずわざわざ日本まで船で来るそれらの人間は、平素、家居して使い馴れた品々をわが身と共に持ち運んでくることがむずかしく、自然また、故郷での習慣で身につけてきた都雅な風俗よりも、応急の必要に仕えなければならなくなる」(5)。しかし、彼らとて家郷の自分の家にあれば、もっときれいでもっと都雅な暮らしをしているはずだという。

食事についても、慣用と習慣の違いによるもので、優劣の問題ではないとする。その上で、ミゲルは西洋食に賛辞を与えている。「本質上の見方から食物のことを考えると、何といっても、ヨーロッパの食物の方が、日本のよりずっと身体の養いに適当し、その味において人の喉にもずっと満足を与えるものだと私は固く信じている」(5)。手づかみで食べるポルトガル人の「不作法」については次のように説明している。「ポルトガル人は、肉類やその他の馳走を、手摑みに扱うということについてだが、われわれの見てきたところでは、あれはヨーロッパで教養のある人々の間で常に行なわれていることではなく、教養のある人々は、ふつう、銀の肉叉や匙を使って皿の料理をとるのが常だ。そのほかときとしてポルトガル人が手で肉に触れることがあってもそれは許されるべきことであって、彼らはその際、テーブルの垂れ布やナプキンの類を使用し、食卓に着いているときも食卓を離れるときも、手を洗って手巾で拭い、悪い臭いの痕跡を少しでも残してはならないと考えているのだから。彼らが直接に手で肉を扱うのは、軍事的生活から来たものかと思われるが、このやり方はインドでは一般的な習慣である。ああいう軍事的な生活では、都雅よりは、迅速と必要とがまず考慮せらるものである。『君がいわれた黒い肌』の従者について一言いっておきたいのは、日本へ連れてこられる従者は、インド、あるいはそのほかのヨーロッパ以外の土地で、金銭的に、あるいはその他の権利によって、買いとられた奴隷なのであるが、ヨーロッパで使われているのは、自由人であり、上品で都雅な教育を受けたものたちばかりだ」(5)。一般のポルトガル人もインドなど開化されていない地で生活することにより、『野蛮な人々』の粗雑な行動を身につける場合が多いことを認めている。日本に来た宣教師が連れてきた黒人は奴隷であり、ヨーロッパで使われていた召使いは奴隷ではない市民であり、自由な人々であることが強調されている。少年使節は、黒人が奴隷状態にあることを当然視している点に注意しておきたい。

異人の摑み喰いはすでに記した種子島の漂着船（1543）に関する記録にも記述されていた内容である。日本の文化にはない行動をするポルトガル人を粗野で無教養な野蛮人と見ていた様子がこのやりとからわかる。

Ⅱ　日本人の黒人観　―鎖国以前―

1　遣欧使節が語る「黒味を帯びた人々」

唐人、毛唐、紅毛人、蕃夷、夷狄、南蛮人、異

国人。外国から来た人々を呼び慣わすことばである。中国では古くから、外国ないしは異民族を夷狄、番人などと呼んでいた。宮崎[1]によれば、「江戸時代の儒者たちは、ヨーロッパ人をいわゆる『夏』（中華）に対する『夷』（夷狄）として軽蔑する態度をとったことから、こういう用語（番夷）が生まれた。『番夷』の番はすなわち野番の番にあたるものである。…旧教国のポルトガル人・イスパニヤ人を南蛮人（「東夷・西戎・南蛮・北狄」の中の南蛮）とよび、おくれてやって来たイギリス人・オランダ人を紅毛人という呼び方もしている」。唐人は、中国、唐の人をさすこともあるが、外国人、異人を意味することが多い。毛唐は外国人を蔑視した呼び方で毛唐人ともいう。島国日本に来る外国人は船を利用したが、南蛮人の乗った船を黒船と呼んでいた。

鎖国以来、19世紀後半になるまで長崎出島以外に日本に欧米人が渡来することはほとんどなかった。出島といえども役人と遊女以外は出入りが禁じられ、居住するオランダ人は出入りの際には許可を要するほど厳しく監視された。日本人でヨーロッパやインド、アメリカなどの海外諸国に渡る人は皆無であった。14世紀から16世紀に中国大陸沿岸から朝鮮半島近海を跋扈し荒らし回った和冦は海外に進出したとはいえ、西洋人とその文化を日本に直接もたらしたわけではない。16世紀、イエズス会の宣教師の来日が白人と黒人の存在を日本人に知らしめたが、それは城下町・港町などの一部の市（まち）に限られていた。時たま外国船が漂着することもあったようだ。太閤記[26]には土佐の国に黒人を乗せた船が漂着したことが載っている。「土州長曾我部居城、ちょうかの森、かつら濱、うら戸の湊より、十八里澳に夥しき大船、慶長元年九月八日寄來之旨、長曾我部方へ告來し也。卽小船を仕立、見せにつかはしければ、南蠻國より、のびすばんと云國へ、商買のため通ふ舟にて侍りけるが、甚風に遇て、楫折船損じ、舳先より鹽入、水に渇し過半死して候。残て黒坊二百五十人、しんにょろ十人餘、商人四人許有。其外五百人餘はかなく成しとなり」。非常に多くの黒人が乗船させられていた。

外国船の来航はきわめて稀なことであった。したがって、ロシアや欧米の船が頻繁に日本近海に出没する幕末に至るまで、民衆が肌の色や髪の色、目の色、ことばの違いによって白人、黒人、黄色人といったいわゆる人種の違いを意識することはなかった。しかし、日本人と西洋人の接触が限定された範囲だったとはいえ、西洋のとらえる黒人観やヨーロッパ以外の国に住む人々に関する観念は、すでに日本に紹介されていた。前述の天正遣欧使節の記録にも西洋流の黒人観が展開されているし、新井白石の西洋紀聞においてもシドチからの聴取として中国、東南アジア、インド、ヨーロッパに住む人々に対する「人種観」が記されている。何れの記述にも現代に通じる定型的な黒人観、人種ステレオタイプが見られる。まず、遣欧使節の問答から当時のヨーロッパの人々の「黒味を帯びた人」「黄色人」「黒人」に関する観念を探ってみよう。

ミゲルは言う。「はじめてわれわれがこの（シンガポール）海峡に住んでいる漁夫たちを見たときの心のなごみは、まことに何というべきものであったろうか。…いかにも彼らは棲家としても宿りとしても、きわめて小さい小舟のほかには何一つ便宜を持っていないからである。しかも、その小舟は気候・天候のあらゆる災害に対して、ただ椰子の葉で葺いた屋根で覆われているにすぎず、激しい嵐の起こるときは船をしかと海岸に縛りつけ、こうして彼らは自分たちこそまったく心の憂いを離れた人間であると考えているのである。彼らは色黒く、ほとんど裸体で常々漁獲によって生活の資をこしらえている」[5]。

レオは肌の黒い人について尋ねた。「あなたはあの漁夫たちが黒いといわれたが、それについて、お尋ねしたいのは、ポルトガルの人の中にも、あるいは彼らに似た人たちがあるのであろうか。今までにもそういう黒い人たちが日本へ渡ってくるのをずいぶん見たことはあるが、それらは商人の奴隷であったし、また聞けば、このポルトガルの種族では、身分の貴い人々は白い色をしているが、卑しい者は、あたかも奴隷となるために生まれてきたかのように、色が黒いということであるが」[5]。ミゲルはレオの考えを誤っていると否定している。しかし、それはポルトガル人の高貴さを

主張するものであり、奴隷化した黒人の存在を否定するものではなかった。「ポルトガルの人にせよ、全ヨーロッパの他の人々にせよ、彼らは黒い顔や整わない顔、歪んだ輪郭などの人々ではなく、彼らは高貴な顔をし、四肢の構成も整っていて、色も優美であり、そのほかに自然と人工との勝れた資を蔵していることは、話が進むにつれて次第に確かなこととしてわかってくるであろう。これに反して商人に伴われてわが国に来る者は黒奴にせよ、あるいは他の黒みを帯びた者にせよ、東洋の方々の国から買われてきた奴隷である。元来、人間の体にさまざまの色がついているのは 身分の貴賤の別ではなくて、気候・風土の性質によるのである。したがって世界には種々さまざまの土地・気候があるように、人々の体の色も実に多種多様である。たとえばヨーロッパの土地では白色の高貴な色を持たない種族は一つとしてつくられていないように、アフリカではすべての人々、アジアでは多くのものが暗色につくられている」[5]。人の貴賤は肌の色によらないと言いつつも、ミゲルは、白色の種族は高貴であり、ヨーロッパの人はすべて白色であると西洋人を賞賛している。

日本人はどのように見られていたのであろうか。日本を巡察したイエズス会のヴァリニャーノ[2]は、次のように記している。「人々はいずれも色白く、きわめて礼儀正しい。一般市民や労働者でもその社会では驚嘆すべき礼節をもって上品に育てられ、あたかも宮廷の使用人のように見受けられる。この点においては、東洋の他の諸民族のみならず、我等ヨーロッパ人よりも優れている」。国民は有能で、秀でた理解力をもち、子どももヨーロッパの子どもよりも容易に短期間に（ポルトガル語）読み書きできるようになるし、下層民もみなすぐれ、ヨーロッパに見られる粗暴さがない、と絶賛している。しかし当時日本人は、ポルトガル人から「黒人」と呼ばれ、一般には蔑視されていた。「支邦人や日本人をも黒人（ネグロ）と呼ぶ習慣になっているポルトガル人には、特に忍びがたいことである」[2]と記されているほどであった。日本人の肌が白いとはいっても、決して高貴なヨーロッパ人の白さではなかったのである。

2　遣欧使節が語るアフリカ黒人

インド南端にあるコモリン岬周辺に住む人々（マラバル人）についてミゲルはこう述べている。「彼らはその諸慾・諸悪の軛に抑えられ、闇に目がくらんでキリストの法のもっとも赫々たる光輝をさえ認めることができないからである。罪はよくわれわれの精神を闇夜で覆い、そのため眼も天上からの光に向けられないようにすることがある。こういうことは何もあの地方のみではない、日本にも起こっていることだ。ただあの地方の人々は体の色が黒みを帯びているように、精神も魯鈍であって、ともすれば悪に向かいやすい性質である」[5]。肌の色の黒い人々は精神的能力において劣っていて、魯鈍だというのだ。

レオの「本当に土着といわれるのはどんな人間なのだろうか」[5]との問いに、ミゲルはこう答えた。「インド人で、ポルトガル人が渡来する前からインドの各地方に住んでいた者たちだ。土着のインドの人たちは黒ずんだ肌の色をしていても容貌は醜悪ではなく、性質は卑屈であってもぶきをとればなかなかのものである」[5]。「今までのあなたのお話から私の考えたところが当たっているなら、世界に黒い肌の人々はずいぶんと多数にあるようだ。…マライ人やピスカーリアの住民もこのような皮膚の色をして生まれた者だと、あなたははっきりいっておられた。だから、世にこの色の種族は非常に多いと考えられるのだが」[5]、と驚くリノ。ミゲルの説明は続く。「マラッカからゴアまで、…その距離は六百レグア、この間はすべて黒い顔の人々が住んでいる土地である。しかし彼ら以外に、ずっと多くの黒人たちがいる。何となれば他の土地はしばらくおき、インドからポルトガルに至るアフリカのかの三千レグアに及ぶ地帯も、ラテン系の人たちはエチオピア人といい、俗にはカーフィルと呼ばれる者たちが住んでいるからだが、この人たちの顔こそ真っ黒で髪は縮れ、そのほか顔だちもインド人とは異なっている。…アジアの真ん中とアフリカを貫く長い長い地帯にも、同じ色合いの人たちが住んでいる。だから、黒い色の者は白い色の者よりは少なくないと考えねばならない」[5]。

肌の色がなぜ黒くなるのかと、リノは問う。

「すべての人々が等しく最初の両親アダムとイブから出ていて、しかもこの二人が白くて美しい色をしていたことが確からしいとするならば、どうしてあんなに多くの人々が次第次第に黒い色に染まるようになってきたのであろうか」(5)。ミゲルは、それは大きな疑問であるが、「第一に、土地の暑熱がこの黒い色の原因だと確信する人々がある。…赤道地方において両回帰線の間に位して熱帯と称せられる地球の中心帯は、太陽の暑熱のあまりにひどく焼きつけられるので、この地方の人間は、すべてあの黒い色を帯てきたというのである」(5)。

しかしそれだけでは説明できないとミゲルはいう。「もしあの黒い色が過度の暑熱だけからくるとすれば、熱帯の住民だけが黒い色に生まれついてくることになり、しかもこの熱帯の諸部分のうち、それが赤道に近ければ近いほど太陽に近いわけだから、その土地の人たちはそれだけよけい黒くならなければならないはずだが、事実に徴してそれが誤りであることは、はっきりわかっている。たとえば、マラッカ人やその他のほとんど赤道直下に住んでいる者たちは、かえって回帰線下の地方に住んでいる者たちよりずっと白いことがある。たとえば緯度でいって南へ三十五度あたりまで伸びていて、まったく熱帯の外にある喜望峰に住むエチオピア人が、一等色が黒く髪も大いに縮れていることが、実地に確かめられているのだから、まったく疑いようのない事実だ。あの岬を回航するポルトガルの船乗りたちは、その地方でひどい寒さや日の短いのを経験するのであるから、黒い色を太陽の炎熱のせいばかりにするのは当たらない」(5)。環境だけの問題ではないという。

3　生殖上の原因に起因する肌の色

「もし、かの色がただ過度の暑熱からだけ生じるのなら、その原因がなくなれば結果もなくなったはずだ。つまりエチオピア人たちがずっと南の地帯へ移ってそこで長く住めば住むほど、黒いあの色もそれだけ褪せていってしかるべきなのに、事実は少しもそうならないで、いくら多くの世紀や時代を経ても、黒い彼らは相変わらず自分と同じ黒い子供を生んでいる。だから黒いあの色も結局、単に暑熱にばかりその原因を帰すべきではなく、実は両親の種と自然のせいとしなければならないと思われる。…もしエチオピア人の夫婦がポルトガルやその他の白色の人々の住む土地へ出かけ、そこで彼らが年月の経過の間に子供たちを世に送ったとしても、その子供たちの色は決して両親より黒さが少ないというわけではなく、また容貌を異にして生まれることもない。反対にもし夫が白い色のもので、エチオピアの女を妻にしている場合、生まれる子の色は母の色よりはよほど白く、そして長い年月が経過するうちに、孫、曾孫、それ以外の子孫は、かの最初の母親から烙き付けられた汚点を少しづつ次第に失い、そしてついには、まったく白い色に復帰するものである。最後の論拠として、もし白い色の夫婦がエチオピア人の土地に移住して、そこで子供をあげるとすれば、その子は全部、同じ白い色だという事実をあげることができる。白人の男が黒人の女と結婚した場合は、黒の汚点がシミのようにまといつくものだが、これも白人との結婚を重ねてゆけば次第に取り除くことができる。だから肌のあの色は、暑熱ではなく生殖上の何かの原因に帰すべきだとは、確かにいえると思う」(5)。ミゲルのことばには、「親から烙き付けられた汚点」、「黒の汚点がシミのようにまといつく」など、黒人を汚れたものとし蔑視する内容が含まれている。人間すべてが汚点をまったくもたないアダムとイブを根源として生まれたとするならば、生殖上の理由とは何をさすのであろうか。リノのこの疑問に対してミゲルは、真の原因を説明することは相当困難なことであると答えている。「中にはこの色の原因を神の正義と、罪に対する罰とに帰そうとし、最初世界を覆う大洪水の後で、ノアがその子の一人ハムという者から失礼な取扱いを受けたとき、当然の憤りを発してこの子（ハム）に必ず悪しくあれかしと祈り、この呪詛のために、ハムとその後裔とには、永劫決して拭い去ることのできないかの汚点が付けられることになったと主張する人々もある」(5)。聖書には是を確認することばはないとしながらも、ミゲル自身もこの説に与する見解をとって、「…この話が聖書に書かれてわれわれに伝えられていれば疑う余地はないであろうが、しかしある事実が聖書の中に見出されないからといって、一概にその事実を拒否していいともいいきれない」(5) と述べている。

4　汚点・欠点としての黒い肌

さらに続けて、「多くの事件の中にはその記録が由々しい著者たちの手で書き残されているのに、さて聖書を編んだ人の注意には上らなかったものがあることをわれわれは知っている。さて肌の色が神罰の一種であったことは、かのエチオピア人がただ色が黒いばかりか、顔つきも多くは悲しく歪んだもので、性質もまたいかにも野蛮・粗暴であって、あらゆる非道・凶悪なことに傾いている人間たちであることからしても、推定できる。つまり先祖の誰かが犯した何かの罪のために、その種族全体がまずは呪いから逃れることができないようになったと信じられる。またあの色合いや容貌の原因は、ときには熱暑から、ときには何か目に見えない天上からの力によって引き起こされ、またそこに何らかの隠れたいろいろの原因があってそれから引き起こされたと、当然いうことができる。こういう次第でエチオピア人が黒い体であるばかりでなく、容貌の上にも差異があって、他の種々な種族がその他の種族から区別せられるようになっているのである。この点についてはわれわれ日本人やシナ人も、目が小さくて深く窪んでおり、鼻が平たくて低いなど、ヨーロッパの人々とは違っているところがある。とにかく以上のようなわけだから、もし何か天上からの目に見えないある力が太陽の暑熱といっしょに働いて、ある種の人々は次第に色は黒くなりはじめ、その髪は縮れ上がってきたのであって、この生まれつきともいうべき一種の欠点が親から子孫へと伝わっているとみるならば、そこになんらの不思議はない。のみならず、ここに一番妥当と思われるつぎのような意見がある。この考えは少なくとも暑熱を原因中の一つであるとし、しかも天上の奇蹟を共同の避難所のように考えてそれに逃げ込まず、何といっても原因の一部は暑熱に、一部は目に見えない原因に、また両親の種にこの黒い色の理由を帰するのである」(5)。

中立的で一見穏当な立場をとるかに見えるミゲルであるが、次の説明を見ると、黒人は劣等人種であり、奴隷として生まれついている、との考えを肯定している。「(黒い人々のすべての種族）一般に無法律、無宗教の民だといえる。何しろ定まった法律、定まった宗教の下に義務的な規制を受けているわけではなく、あたかも俯いてひたすら口腹の慾に従うように自然がつくった畜生のごとく、大部分は自己の欲望と罪とに耽り、何の修行も、何の洗練された感覚もなく生活している。だからあるヨーロッパの哲学者がかの種族こそ奴隷になるために生まれてきたのだといったのは、確かに当たっている」(5)。アフリカに住む人々とインドやアジア諸国に住む人々を区別し、前者の黒人種を粗暴で何らの洗練された文化ももたないもっとも野蛮な民族と断定している。すでに述べたように、西洋人は肌が白く高貴であると考えていることと、アジアの黒味を帯びた人々は開化した状態にないと見なしていることとを併せて判断すると、ミゲルはアフリカ黒人に限らず、肌の白さまたは黒さは人間の質に比例ないしは反比例すると理解していたといえるようだ。

少年使節が帰国して間もなくキリスト教の布教は弾圧されることになり、ミゲルたちが伝えたヨーロッパ情勢、世界の人種に関する考えは、日本人に広く伝えられ広がることはなかった。しかし、彼らに接したキリシタンの間では、ミゲルらの説明が当時の西欧事情、西洋の考え・思想として伝承され語り継がれたことは想像に難くない。こうした人種観が中世から近世ヨーロッパでは普及していたことをミゲルの話は示しており、黒人奴隷の存在が当然のこととしてキリスト教徒にも受け入れられていたことは重要である。なぜなら、日本に渡来したポルトガル人宣教師もまた同様の人種観をもっていたはずであるし、事実彼らは少なからぬ黒人奴隷を日本に連れてき、彼らを蔑視する言動をとっていたからである。日本を出たことのないリノが、相等数の黒人に出会ったことがあると語っていることにも、ポルトガル商人や宣教師は、相等数の黒人を使用していたことが裏付けられる。多くの日本人は、宣教師たちの黒人に対する対応の中に、ヨーロッパの「差別」的な人種観を感覚的に感じ取っていたに違いない。しかし、

当時日本でも身分制社会が厳しく維持されており、人権概念や平等の観念がなく、人間以下の不可触賤民が設けられていた日本の社会で、黒人奴隷に対する宣教師の対応に偏見や差別を感じた者は皆無であったであろう。鎖国を経て、幕末以降一気に押し寄せる西欧化の波の中で、ヨーロッパで一般化していた人種観、黒人観が日本人の間に急速に定着していくことになるのである。さらに、偏見や差別の感覚や意識は、人間の尊厳や平等性に関る人権思想が輸入され、日本における身分制が撤廃される中で次第に醸成されてきたといえよう。

Ⅲ　日本人の西洋人観と黒人観ー鎖国後ー

1　大隅国種子島の西洋人

鎖国後ほぼ100年を経た1708年（宝永五年）8月28日、鹿児島県の沖にたくさんの帆を張った船が航海し、翌29日にも再び現れた。同年10月5日付けで新井白石[1]は次のように記している。「八月廿八日、薩州の沖に、帆数多き船東へとみえたり、廿九日、また右のことく現れて候て、本朝の人のことく、さかやきそり刀さしたる異国人、陸に一人あるを、長崎へ通して、長崎へよひて故をとふへきよし」。不審な船に対する屋久嶋の尾野間村の人たちの警戒心も強かった。「帆の数多き船の小舟を引きたるが一隻、東をさしてゆくあるを、村のものども、あやしみ見て、打出て守り居るに、夜に入り空くもりぬれば、その行方しらず」。翌日「彼嶋の恋泊といふ村の人、権兵衛といふ百姓也。炭焼（か）む料に、松下といふ所にゆきて木を伐るに、うしろのかたにして人の声したりけるをかへり見るに、刀帯（び）たるものゝ、手して招く一人あり。そのいふ所のことばも、聞わかつべからず。水をこふさまをしければ、器に水汲（み）てさしおく。ちかずき呑て、又まねきしかど、その人刀を帯たればおそれて近づかず。…我すむかたにたち帰りて、ちかきほとりの村々に人はしらかして、かくとつぐ」[1]。嶋をあげての異人騒動の様子がわかる。

西洋人の日本漂着は、キリシタンや宣教師の入国及び布教に対する警戒もあり、幕府の厳重な監視を引き起こした。その一方で、西洋に対する強い関心もあり、新井白石はこの異国人を長崎から江戸まで移送させ、詳しい事情聴取を重ねている。新井白石は異人（シドチ）の調書を詳しく作成し記録に残している[1]。「大隅国の海嶋に、蕃夷ありて、一人来たりとゞまる。日本、江戸、長崎などいふ事の外は、其言語きゝわきまふべからず。みづから紙上に数圏をしるして、ロウマ、ナンバン、ロクソン、カステイラ、キリシタン、などさしいひ、ロウマといひし時には、其の身をゆびさせり」。イタリアのローマから来た西洋人であるらしいことはわかるが、ことばが通じず閉口したようだ。オランダ通詞を介してやりとりをした。長崎から江戸に送られてきたシドチは大柄の人物として記されている。一般に身の丈の小さい日本人から見ると、物珍しさも手伝ってこの異人がよけいに大男に見えたのかもしれない。「其のたけ高きこと、六尺にははるかに過ぬべし。普通の人は、その方にも及ばず、頭かぶろにして、髪黒く、眼深く、鼻高し」[1]。顔つき目鼻立ちがまず記録されている。興味深い点は薩摩や長崎の各役所でそれぞれシドチの記録を残しているが、身の丈の大きさが記録により異なり、伝聞による記録になるほど背丈が大きく記載されている。実際より誇張されている可能性があり、おもしろい。長崎注進邏馬人事（宝永五年）では「年四拾歳程大男色白鼻高ク有候」[1]とある。長崎実録大成では「身の長五尺八九寸、鼻筋高く色白く髪黒し」[1]となっている。さらに時代が下った徳川実紀では「其丈高きこと六尺に越えて、髪黒く、眼深く、鼻高く、弁舌さはやかにして、いかにも彼国博聞強記の人にて」[1]と、六尺以上に大きく西洋人らしく特徴的に描写されている。月堂見聞集では「異人せいの高さ七尺二寸、黒装束、頭のかつかう髪黒くちぢみ、角入面白く、鼻筋押通り、南蛮国三番程の出家のよし」[1]と、長崎夜話では「其人物、毛髪はくろくして紅毛のごとくに赤からず、眼も紅毛人の目のさまにあらず、から、日本の人と同じ。鼻のすぐれて高きこそ同じからね」[1]、と記録されている。人づての見聞集では身の丈は七尺を越える大男になり、夜話では異人一般の外見に対する定型化された特徴があげられ、当時の外貌容姿に関する日本人の外国人観が定型化しつつあることを示唆している。

異人に対する興味の強さは、獄舎に入れられた西洋人の様子を細かく記述している点にも表れている。「奉行の人々のいひしは、彼人日々に食ふ所の物、定れる限等あり。初め長崎に至りし日より、こゝに来るに及びて、すこしも相変ぜず。よのつねの日には、午時と、日没の後と、二度食ふ。…その斎戒の日には、午時のたゞ一度食ふ。但し、菓子は、その日も両度食ひて、其数をくはふ。…その菓の皮実等は、いかにやするらむ、すてしあとも見えず。斎戒の日とても魚をも食ふ。またこゝに来りしより、つゐに浴せし事もあらず。されど垢づきけがれし事もあらず。これらの食事の外に、湯をも、水をも飲みし事もなしといふ」。日本の習慣からは理解できない、不可解さ不思議さを西洋異人の食事や行動のし方に対して強く感じている。キリスト教布教に対する警戒心、外国に対して鎖国体制を維持するための細心の注意を払っているが、西洋人に対する憧憬や羨望をこれらの資料から読みとることはできない。鎖国体制のもとでは、定型化された西洋人観を形成するには日本人と西洋人の接触があまりにも少なすぎたということであろう。

平戸の出島の様子を記した古川古松軒もまた、西洋人と黒人の肌の色と容貌にふれている。「紅毛人は色白く、目のうち・鼻、日本人・中華の人とは大ひに異なり、眉毛も薄赤く、見る所の人相にいやみ多し。頭髪は剃りて黒々とせし假髻（かもじ）を被り、衣服は圖のごとく尤けつかうの衣を服せるなり。…鬼奴崑崙奴（クロンボウ）長低くして色黒く鼻ひくなり」[7]。西洋人も黒人も共に醜いと云わんばかりの記述である。日本人とは全く異なる顔つき、言語並びに衣服を持つことから、黒人に限らず白人に対しても肯定的な印象を持っていなかったことが示されている。

2　白石が聴取で得た世界の情報

新井白石は、1707年に種子島に渡航したイタリア人シドチからの聴取をもとに世界の国々について整理している。「大地、海水と相合て、其形円なる事、球のごとくにして、天円の中に居る。たとへば、鶏子の黄なる、青き内にあるがごとし。其地球の周囲九万里にして、上下四旁、皆人ありて居れり。凡、其地をわかちて、五大州となす」[1]。地球は丸く、宇宙にあり、至る所に人々が住んでいるが、大きく5つの大陸の分かれていると書いている。ヨーロッパ（欧邏巴、奥南蛮）、アフリカ（利未亜）、アジア（亜細亜）、北アメリカ（北亜墨利加）、南アメリカ（南亜墨利加）の5つである。アフリカ、アジアの記述をみてみよう。ケープタウンは、「アフリカの」極南の地にあり。虎、豹、獅子、禽獣類最多し」。「利未亜の地、七百州ありと注して、此方名山大川、其大略をしるす。ローマ人、ヲゝランド人等の説く所も、此方土俗人物等、皆詳ならず。おもふに、此方トルカの地に係りぬれは、ヱウロパ人至るものすくなくして、其事いまだ詳ならぬ歟。たゞそのカアプ、マタカスカの地、ヲゝランド人説くところは、其人禽獣にひとしといふ。ヲゝランド人、マタカスカに至て、其の地産をとる。土人畏（れ）避けて相近づかず。飲食の余をすつるを見るにおよびては、またひそかに来りて竊食ふ。その癡保なる事かくのごとしといふ」[1]。ヨーロッパ人の目からはアフリカに住む人々は人間とは見なされていない。あたかも野獣であり、痴呆者の如く記述されている。

ペルシャはインドの西に位置するアジアの国であり、良馬の産地として紹介されている。ゴアは西インドの地で、「番船輻輳の所也。ポルトガル人、其地に拠りて、互市のことを管す」と記し、ポルトガルのアジア植民地の要所とされている。セイロンについては、「セイラン、インデヤ南海の中にあり。…此国の南地に、コルンボと称ずる所あり。其人色黒し。漢にいふ所の崑崙奴、或はこれ也。ヲゝランド人の説に、凡そ赤道に近き地の人、ことごとく皆クロンボ にして、其性慧ならずといふ。其クロンボといふは、コルンボの音の転ぜしにて、その人色黒きをいふ也。此に、黒色をクロシといふ。されど、近俗、人の色黒きを、クロンボといふは、もとこれ番語に出づ」[1]。「クロンボ」という語はセイロンに発するとの説である。彼の地の人々もまた肌が黒く、優れた性

質をもっているとは言い難く、劣等人種と見なされている。

さらに東進して「スイヤムまたシャム（暹羅）ともいふは、すなはち暹の番音也。其地、南方にありて、気候熱甚しく、たゞ其冬月に至る時、夜稍涼し。其人螺髻（ほら貝型のもとどり）裸体、糸帨（手拭）を用いて腰を束ぬ」(1)。「スマアタラ（須門那）、アジア地方、南海の中にあり。わづかにその東北海を隔て、すなはちマロカの地也。此国、直に赤道の下にあたれり。春秋の二分には、日影を見ず。春分より秋分に至て、日影南にあり。秋分より春分に至て、日影北にあり。気候極めて熱く、たゞ夏冬には、其熱甚しからず。人皆裸体にして、色黒く、俗また暹羅に似たり」(1)。「ジャガタラ（咬喇巴）、スマアタラ東南海中にあり。此国すべてジャワといふ。ジャガタラはヲゝランド人拠る所の地名にて、其治城はバタビヤにあり。南にさる事十四五日程、ジャワに至る。即是本国の主、都する所也。其王をば、ススーナムと称す。其俗、髪をかうふ（ぶ））り、薄き布に、糊強くして、頂に纏ひ、袖窄き衣に、短き袴を着く。地方暖にして、穀一歳に再熟し、庶物また豊衍なり。これによりて、其人飢寒をしらず。性また懶なる事甚し」(1)。

アジアのシャム（タイ）には裸で腰に手拭いを下げて動き回る人々が住んでいる。シャム人とスマトラ人は似ていて肌が黒いと紹介されている。ジャカルタは肥沃な地であり人々は豊かに暮らしているが、住民の性質は「懶」、つまりなまけ者であるという。シャム、スマトラにしてもジャカルタにしても決して人間的にも文化的にも優れているとはいえず、人々は禽獣に近いものとして記述されている。

日本の東南海上に金銀を産する未知の嶋があり、日本人が渡っているとも記されている。「ヤアパンジス（日本人）の子孫、此国にあるもの、すでに三千人余人、集り居て、聚落をなす。其人、本国の俗を変ぜず。土人は、双刀を腰にし、出る時は槍を執らしむ。其余も皆一刀を帯ざるはなし。イスパニヤ人これを御するに法ありて、妄りに国中に出行く事を聴さず」。ジャガタラより南の海上にある詳細不明のノーワ・ヲゝランドについても紹介している。「其土極めて濶し。其人禽獣のごとくにして、言語通ぜず、地気甚（だ）熱くして、こゝに至れるものども病ひし死して、生き残るものわづかになりて、帰る事を得たり」(1)。ヨーロッパにとって東アジア、アメリカ、オーストラリアなどの未知の土地は、未開の地であり、そこにすむ人々は野蛮人と見なされた。

3　長崎民衆と西洋人・黒人

ポルトガル人を閉じこめる目的で1636年に作られた人工の島が出島である。1641年にオランダ商館を平戸から出島に移して以来、オランダ商船の港となり、オランダ人の居住地となった。鎖国が行われた間にも、オランダ人は厳重な警戒、監視の下に商業活動を行っていた。一方、「シナ人は、町の南端にある土手を廻らせた薬園という丘にすんでい」(6)た。出島への出入りは厳しく制限され、禁制として次の箇条が掲げられた(3)。一、傾城のほか女の入ること。一、高野聖のほか出家・山伏のはいること。一、諸勧進の者、乞食のはいること。一、橋の下を船で通ること。一、許可なくオランダ人が島から出ること。

出島商館付の医師として1690年に日本に来たオランダ人ケンペルの記録(6)によれば、出島に出入りした人々は、薬理学を学ぶための従僕などもいたが、主に監視人が中心であった。門番（５人、貿易の時期には10から13人）、探し番（身体検査係、３人）、身体検査を受けないですむ者として、奉行に随行する者、大小通詞とその子息の稽古通詞であった。オランダ船が港内に停泊している間、各町内から毎日４人出される番人、絹取り扱い商人が出す番人４人、身分の卑しい町人か人夫からなる巡回警備をする廻り番、季節によって火の番をする家主・筆者・乙名・勘定方・料理人、出島の周囲を警戒する船番などである。そのほかに、オランダ人に関する仕事をし、オランダ人の世話をすることを義務づけられている役人がいた。番人すべてとオランダ人の使用人（料理人、人夫頭、日雇人夫）を統括する長崎町内に住む役人、日行使（水門の施錠、倉庫の状態、大工や左官の作業ぶりの見回り）と数人の書記、出島地所人（24人の家主）、大通詞、阿蘭陀通詞（約123人から150人）もいた。これらの人々は、オランダ人と昵懇になることを避けるために、頻繁に交代させられたということから、出島の出入りはきつく制限されたとはいえ、長崎の町にはオランダ人と接触したことのある人がかなりの数いたことになる。

当時出島には、オランダ人のほかにも奴隷として使用されていた黒人や東南アジアからつれてこられ召使いとして働かされていたインドネシア人がいた。平戸オランダ商館の日記(8)や長崎オランダ商館の日記(23)に黒人のことが記されている。日本に来る西洋人は、黒人を召使いとして伴っていることが多かったのであろう。1637年の平戸のオランダ商館の日記には、関連することが書かれている。「昨年皇帝の前に出たポルトガル人が再び江戸に来た…その頭人は乗り物と乗馬で、もう一人は馬で着いた。その一行は、奴隷と数人の日本人下僕からなる」（一月二十一日,ニコラス・クーケバッケル記）。

長崎オランダ商館の日記には、1641年10月１日（寛永十八年）づけで一つの事件が記録されている。「天明後一時間を経て、昨夜會社の食料品貯藏室の竹の小窓から、燭臺三、心切り二、…日本スホイト銀一六０匁等が盗まれた」。賄方が誰彼なく日本人にも話したため、事件の噂は広がった。島のボンジョイ（長崎奉行所及び町方の役人）は、何人も島外に出ることを禁じ、奉行に報告した。盗人は島の周りに廻らした板塀の下に穴を掘り、横板に結びつけた縄によって下に降りたことが、オランダ人によって発見された。６，７人のボンジョイが、20人ないし25人の兵士をつれて島内をくまなく調べ、番船も島の周りを調査した。３，４人の重鎮をのぞくオランダ人の家宅捜索も行い、三つの燭臺の上部を折って、下部を閉鎖した家の窓から一軒に一箇宛投げ込んであるのを見つけた。前の夜島で番をしていた日本人の賄方助手及び料理場にいた黒人ピーテル・ノラインを嫌疑者として５，６回訊問した。オランダ人１人も取り調べ、奉行に差し出すため日本文にして書き出すよう命じられた。翌日（二日）、「彼ら（ボンジョイ）は、隣接五軒の従僕一同を再び調べ、、十三人を後方の一軒家に拘禁して番人をつけ、予（マクシミリヤン・ルーメル）にオランダ人及び黒人一同を取調べて、犯人または被疑者はないか明らかにすることを勸めたので、その通りにした」。五日、「正午頃、十三人の拘禁者が奉行に呼び出されて取調べを受けた由を聞き、彼らを貰いうけようとしたが許されず、正午過ぎボンジョイが來て賄方の助手フィンクと黒人ピーテルを連行した。両人は少し訊問された後夕刻歸ったが、同行のボンジョイはピーテルが日本人三人と共に嫌疑を受けたゆえ、鎖に繋ぎ更に呼び出すまで拘禁するよう傳えた」。ようやく七日正午になって、「拘禁者三人は來るべき大祭（諏訪神社大祭）と船の出帆とのため、奉行より假りに釋放された」。これが事件の顛末である。容疑がかけられた人の中に黒人の名前があり、奴隷として出島の商館で働いていたことがわかる。

平戸商館の日記（1628年10月21日）には、館員が旅行に出発したときの同行者が記されている。ピーテル・ムイゼル以下７名と召使い７名であった。召使いは、アムステルダムのアンドリース・ヤンスゾーン、ホールンのヘリット・アルベルツゾーン、ミッデルブルフのヤコブ・バスティアンス、カルのアレクサンドル・オリファント、セイロンのディエゴ、料理人、コロマンデル海岸のペドロ、洗濯人コロマンデル海岸のドミンゴであった。後者３人は黒人であったことが明記されている。召使いの出身国が実に多様であり、館長が替わろうと料理や洗濯、掃除など日常の世話をするために黒人が使用されていた。

黒人に関わる事件はほかにも記録されており、出島に出入りする日本人との間でもめ事も起こっていた。「出島小使いの武七は、…四ッ（午后十時）を聞いて巡視に出た。途中まで来ると、黒ん坊のトラアパに引き留められ、胡椒があるからと勧められた」。武七はこの誘いにのり胡椒の密売（抜荷）をやって儲けたが、兄の治助に知られ密売は発覚した（1765年）。「この胡椒は、出島の黒ん坊たちが共謀して二十六番蔵を切り破り、盗み取った品物であることがあとでわかった」。武七は「自訴同然につき長崎払い」(19)となった。

黒ん坊とのけんかも紹介されている(19)。長崎港外の香焼島で弘法大師をしのぶ恒例の祭りが行われた(明和六年、1769年)。長崎の街から当番と

して出た宗平次ら６人は、帰路についたが「出島近くでちょうど潮干どきになって船が進まず、しばらく潮待ちをするよりほかなかった。すると、出島の外囲いの塀から顔を出した三人の黒ん坊が、なにやら口汚くのしり、小石まで投げかけてきた。…黒ん坊はやがて塀を乗り越え、干潟を渡って船に乗り込んできた。そこで双方の殴り合いが始まり、こぶをこしらえたり、かすり傷を負うものなども出てきた」。騒ぎを知った港番所の番人がくると、黒ん坊は塀内に逃げ込んだ。前後不覚になるほど酒を飲み、異国人を相手に喧嘩したかどで宗平次らに「一同二十日戸締め」の刑が言い渡された。

図２　オランダ人図：城義隣筆（1800年頃）オランダ人とインドネシア人召使い（東京都江戸東京博物館・ピーボディ・エセックス博物館、1999より引用）

「オランダ商館晩餐図」[28]（1800年頃）や「オランダ人図」[28]（1800年頃）、「インドネシア人図」[24]（年代不詳：ライデン国立民族博物館蔵）など当時の商館や西洋人の様子を描いた絵には黒人奴隷以外にも、召使い奴隷として商館に仕えたインドネシア人が描かれている（図２）。出島の出入りが制限されていたにもかかわらず、長崎の人々の中には出島を介して、白人、黒人、「黒みを帯びた人」に接する機会があった人も多かったのである。そのほか、唐人との密売買も盛んに行われた[20]。当時、長崎、出島近辺は、オランダを窓口としたとはいえ、アジア、ヨーロッパなど世界各地のいろいろな「人種」が交わる「国際」都市だった。

4　丸山遊女の西洋人観・黒人観

長崎の町は、貿易港として多くの人々でにぎわっていた。「長崎の港には五千の人々が定住している。之に加え、船が着くたびに多くの人々が一年の大半を当地で過ごすことになる。なぜならば七月に到着して、二月か三月に出帆するからである」[14]（一五八九年付、日本管区長アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ宛、一五八九年度・日本年報）。宣教師フロイスもまた、「通商が機縁となって、すでに日本人たちは長崎へ来航したポルトガル人たちと関係を保ち、各地から各種の非常に多数の人々がこの（長崎港）へ集まっている…。追放処分を受けて、この地に居住しようとしている人々を合わせると、住民数は非常に増加して八千人以上になると伝えられている」[15]と報告している（一五九五年十月二十日付年報）。季節によって、海外の商船関係者が多く滞在し、日本各地からも商取引関係者が出入りしていた。鎖国後は出島に商館が移されたが、海外との交流事情は似たものであったであろう。

市井の人々は禁止されていたが、遊女は出島への出入りが自由であった。「道徳や信仰を忘れた血の気の多い若いオランダ人達は、一夜の楽しみを買うために、普通なら２～３マースが相場の代物に対して……５ターレも支払わされる」[6]。シナから若者が遊女遊びに来ることもあった。「遊びがてらやってくる連中というのは、若い金持ちのシナ人であり、長崎でただ遊ぶというよりは、正しく言えば女遊びをするためにやって来るのである。シナでは金で女を買えるところはどこにもないが、日本では至るところで女郎買いができ、とくに長崎の遊女は、他の町の女郎よりもずっとよい稼ぎをしている」[6]、「シナでは女郎屋と淫売は厳罰をもって禁じられており、シナの若者は日本へやって来ては、彼等の欲情を冷まし、そのため散財するので、シナ人がこの日本の国を『シナの娼家』と言っているのは、故なしとしない」[6]。外国人による遊女買いが頻繁に行われていたことを物語る。

古賀十二郎の丸山遊女に関する研究[13]が、遊女の「紅毛人」観に詳しい。古賀の分析を参考にしよう。丸山遊女は、紅毛人に歓迎され、1695年、紅毛人「外科医 Martin Remei が、丸山遊女に、僅か三日間馴染みて、恋慕の情やみがたく、其遊女が郭へ還ったと云ふので、いたく失恋した事などは、特筆すべき事である」という。「之に反して、遊女たちは、概ね人種差別観念に支配されてゐた者と認めざるを得ないのである」として、延宝長崎土産に描写された遊女の紅毛人に対する次の記述を引用している。「誠に鬼の人くわぬばかりのおそろしき異国人の言葉かよわねば、文字も通せず、同じ食せざれば、酒のさし引くもあじなく、同じ調子ならねば、琴三味線のつれ引ならす、彼六人の山伏の大江山の一座の心地して、明暮何の慰に心はるゝ事あらんや。かゝる折りは、さのみなじみならぬ地下人にても、又は小にくき旅人にても、自然はおもひ出つゝしのばるゝ事も有べし。何程いやなる日本人にても、彼鬼よりはまさりたらんとおもわれんまでのたのしひ也。いはんや、なさけ有人をや」[29]。西洋人は、ことばも通じず、一緒にいても何も楽しいことはなく、どんなにいやな日本人でもこれほどいやではない、とまでいっている。

西遊雑記の長崎のくだり[7]も遊女の紅毛人嫌いを表している。「遊女も、紅毛やしきへ行事は大に嫌ひ、外聞あしく思ふ事ながらも、公議よりの御定故に無是非行事なり。尤紅毛へ遊女は、丸山中にて容躰の悪敷はやらぬ遊女をやる事なり。尤紅毛人の気に入れば、高金の物を、何にても与へる事なり。夫とても、丸山にて能き容にても出来て、はやるやふになれば、金を出して代もの遊女を出し、自身には紅毛人の所へは行ぬ事なり。紅毛館にても若しも不儀有る遊女あれば、丸裸にして身體を殘る所もなく墨を以て塗りて、門より追ひ出す事也」。日本人相手の遊女が人気がなくなれば、外国人相手に格下げされることもあった。「はやらねばやがて唐人行にをろすも有、又水あげより唐人行に仕出す女も　よくはやりて手つよき敵も多けれバ　日本行になりのほるお有也」[27]。当地の人のいうこととして、５年か10年のうちには追い出される遊女がいて、丸山遊郭まで帰ることができず近所の家に逃げ込み、着るものをもらって夜になってから帰る例もあったという[13]。遊女からは、一般に西洋人より南京人が好まれたようだ。「唐人にも、根さしいやしからぬ人からやさしく、…なさけふかきもの有り　ゑびす（紅毛人）にハなし　多くハ南京人に有也」[27]。文化の違いの大きさが、「紅毛人」の行動、振る舞いに馴れない遊女に異人を嫌わせる一因になっていたことは想像に難くない。

出島に黒人が居たことは述べたが、オランダ人の身辺の世話をしていた黒人は日本人との関わりもあった。当時、黒人を「クロンボ、オランダ・クロンボ、クロンボ・オランダ、クロンボ・マタロス、クロス、クロス・マタロス」などと呼び、黒坊、くろほふ、阿蘭陀くろぼふ、崑崙奴等と表記していた[13]。長崎を訪れた古川古松軒[7]は次のように記している。「阿蘭陀人の居る出島と云に行見しに此所は四方を石垣にして石橋一つより出入す。門の側に番所有りて出入りの人を改る事なり。此橋まではいつも紅毛人並にクロンボウ出で、日本人を見ては例の蠻語にて戯れる事、此邊の男女は数年聞なれし語故に大槩は解しもし、紅毛人・クロンボウも十にして六つ七つづつも日本語を解すといふ。近所の婦人・子もりなど門前に遊び居れば艶言をいひかけてよろこぶ體なり」（天明三癸卯年七月）。片言の日本語あるいはオランダ語を介して黒人と日本人が話す場面がありふれてあったことを示すものである。

しかし、接する機会があったとはいえ、黒人は日本人に受け入れられてはいなかった。出島に居留する外国人であったが、黒人は奴隷の身であり、郭の出入りは禁止された。出島の黒人が遊女屋に登楼し関係者が罰を受ける事件があった（宝暦二壬申年二月三日、1752年）。日本人が手引きして

遊女に会わせたが、「旅客たちは、覆面のまゝゐるので、…床入りの際にも、新蔵が燈を消すやうにと云ふので、其意に任する事にした」。繰り返し登楼するたびに、「覆面客の相方を勤めてゐた遊女たちは、いよ々怪しく思ひ、四月廿六日の夜は、覆面客を篤と気を付けてみると、意外にも、黒坊に相違なき事を確かめ得たので、非常に驚き、遣手ふじに、向後覆面客が登楼するとも、断じて出会いいたさぬ旨を告げておいた。また、遣手ふじも、同道者の新蔵へ、重ねて黒坊をつれて来らざるやうに、注意しておいた」[13]。伏せたにもかかわらず噂が広まるなか、黒坊は再度登楼した。事件は発覚し役所へ届け出た。関わったのは21歳、25歳、28歳、32歳の４人の黒人であった。遊女は叱りの刑を受けた。手引きした貞右衛門には厳しい判決が言い渡された。貞右衛門に対する入れ墨、長崎払いという重い「御仕置き」に、人間以下の黒人を人間として扱ってはいけないことが示されているし、当時の日本人の黒人観が表れている。貞右衛門は出島に日雇いとして出入りしていて黒人と知り合ったのだった[19]。遊女といえども黒人を相手にした仕事は重罪に値するものだったのである。金子を払ったとしても、黒人は一人前の客になることはできなかった。この事件は一大珍事であったが故に、寛永の巷談として形を変えて人々に語り継がれ、甲子夜話[16]に狐に化かされた遊女の話として載録された、と古賀[13]は考えている。

Ⅳ　考察

1　日本人と西洋人の間の混血児

1633年（寛永10年）に最初の鎖国令が出され、1635年には日本人の海外からの帰国と出国は一切禁止された。「条々　長崎　一、異国江日本之船遣之儀、堅停止之事　一、日本人異国江遣し申間敷候、若忍ひ候而乗渡る者於有之ハ、其者ハ死罪、其船船主共ニ留置、言上可仕事　一、異国江渡り住宅仕有之日本人来り候ハゝ、死罪可申付事……」[12]。さらに、翌1636年（寛永13年）には、南蛮人との間に生まれた「混血児」も海外に追放する令を出している。「一、南蛮人子孫不残置、詳ニ堅可申付事、若令違背、残置族有之ニおゐてハ、其者ハ死罪、一類之者ハ科之軽重ニより可申付事一、南蛮人長崎ニ而持候子幷右之子供之内養子ニ仕族之父母等、悉雖為死罪、身命を助ケ南蛮人被遣候間、自然彼者共之内、重而日本江来歟、又者文通有之おゐてハ、本人者勿論死罪、親類以下迄随科之軽重可申付事」[12]。「混血児」およびその係累はすべて国外に追放するという厳しい措置であった。

オランダの平戸商館ニコラス・クーケバッケル[8]は、当時の追放の厳しさについて日記に記録している（1636年９月20－22日）。「今年長崎に来た四隻のガレオット船が今日出帆した、ときいた。皇帝の命令により、この船で二百八十七人の男女及び子供が送り出された。この中にはポルトガル人の子供だけでなく、数年間ポルトガル人と同棲し、その後日本人と結婚し、五、六人或いはそれ以上の子供のある女もいて、その子供や夫と別れねばならなかった。また、混血の子供を引き取り、育てたために、追放される日本人もいた。カピテン・モールは、ガレオット船の出帆まで、他の人々共に新しい建物に監禁されていた」。また、禁教と関わって外国人や海外在留の人との文通に対する過敏な警戒と残酷な処分も記録に残している。「数日前、五島のキリシタン数人が捕らわれ、長崎に連れてこられ、足を上にしてつるされ、殺された。また、昨年マカオに住む□からの手紙を持ってきたため、柱にしばりつけて焼かれたポルトガル商人の子供は、その父の過失のため、今首をはねられた」[8]。シナのジャンク船でマニラから琉球に来た日本人を含む４人の宣教師は、琉球人により薩摩に送られ捕らえられた。その後、長崎で「フランス人、バスク人、日本人の宣教師は、口輪をはめ、頭を下から上まで剃り、笑い者にするため一人宛赤い絵具を塗られた後、運ばれ、足を上にしてつり下げられた。スペイン人の宣教師は、様々な拷問により、牢獄で死んだ」[8]（一六三七年十月三日）。

1639年（寛永16年）には、オランダ人は日本で子どもをもうけることを禁じられ、オランダ人やイギリス人の間に生まれた二世とその母親は、バタビア（ジャカトラ）に追放された。当時、日本に滞在していた西洋人と日本人女性の間に子どもが生まれることも稀ではなかった。日本にいる商館長、上級商務員、その他の職員に宛てた、オランダ提督による「日本において会社に奉仕するために守るべき訓令書」[8]からも当時の事情が伺える。「日本の管理をピーテル・ファン・サンテンだけに任せることに満足出来ない。彼は未だ余りに若く、誇りが高く、勇気があり過ぎる。この性格は、日本人の気分や性格とは正反対であるし、特に外国人として彼等の国で認められるには全く反対のものである。その上彼は日本で、江戸に一人、平戸に一人、子供を設けている。これは、…彼自身が商館長として留まる時、この様なだらしのなさが少しはただされるかどうか、疑わしい。彼自身の他に、別々の所に住む二人の妾と子供を養わなければならぬ費用がかかるし、その他のさまざまなよい配慮からである」（一六三三年五月三十一日）、「故ナイエンローデの…財産の中の、千テールを、彼の混血児の養育のために日本に置くことは、全く煩わしいことである。これによりピーテル・ファン・サンテンは、…自分の子供を如何に保護してもらえるかを、知ろうとした。…混血児の出生は、オランダ人の敬虔な性質を堕落させている」（一六三三年五月三十一日）。長崎においては、日本人女性と西洋人男性との間の「混血児」は珍しくなかったのである。

ジャガタラに追放された人たちの中には、外国人と結婚した人もいた。寛文年間（1660年代）になり通信を許され、郷愁の情を故郷の肉親宛に送ったのがジャガタラ文であった[25]。「…一、つりのとり（寛文九年）かのへいぬ（寛文十年）此両年ここもとより訪れ申し上げず候ゆえ御こころもとなくおぼしめされ候だんもっともに候。しがれどもいささかしさいこれなくぶじに候間御心にかけらるまじく候、わがみ事子供十人の母になりまいらせ候つるが、六人はうしないいま四人さかんにおわし候、大あに十四さい、そのいもと十二さい、又此いもと六さい、此つぎにいもと八ヶ月になり、いずれもそくさいにまいらせ、なかんづくおちちさまうばさまへ大あにとつぎのいもとへふて申あげまいらせ候、御そくさいにおわしまし候よしかずかずうれしく思いまいらせ、そこもとよりの御ふみのやうすうけたまわり、ひとへにけんざんのここちしてそでをぬらしまいらせ候…　寛文十一年四月廿一日　こるねりや　じゃがたらより」。「日本こいしやへかりそめにたちいでて又とかえらぬふるさとと思へば心も　こころならずなみだにむせび　めもくれゆめうつつともさらにわきまへず候へども　あまりのことにちゃづつみ一つしんじまいらせ候　あらにほんこいしやへへ　こしよろ」[25]。

前者のこるねりやは、既述の平戸のオランダ商館第五代館長コルネリヤ・ファン・ナイエンローデが日本人女性スリシャと再婚し、二人の間に生まれた子どもである。ナイエンローデは1633年に死亡し、スリシャは半田五右衛門に再び嫁いだ。こるねりやは商館に引き取られ育てられたが、1637年にバタビヤに追放された。彼女は彼地で東印度会社の事務員と結婚し、十一人の子どもに恵まれ、裕福な生涯を送った[25]。

西洋諸国の人々と日本人女性の間に生まれた二世、いわゆる混血児の存在は、海外との交流の乏しい日本といえども、16世紀の中世末頃から西洋との深い関わりが出来つつあったことを示すものである。江戸時代に入ってから、島原、天草地方の女性が、海外に出稼ぎに行くのをさして「からゆき」と呼び、主に東南アジアに行く場合のことであった。後には斡旋業者によって、海外に娼婦として売られていく女性も多くなった[22]。歴史の表舞台に表れることはなかったが、長崎を窓口とした貿易、追放や人身売買による日本と海外の国との結びつきは中世末以降鎖国の間もとぎれることなく続いてきたのである。いったん海の向こうに渡航した彼女らは、二度と再び日本の土を踏むことはなかった。短いジャガタラ文は、彼女たちの異国の人々の間での生活と募る望郷の思いを伝えているが、異国の人々に対する思いや印象を教えてはくれない。

2　物珍しい西洋人

江戸に参府したケンペル[6]は、人の往来の激しい町では西洋人は珍しくないのであろうと、次のように述べている。「将軍のお膝元で人の出入

りの多いこの町では、われわれ一行などは別段珍しくはないのであろう、他の町のように軒先に出てわれわれの一行を見物しようとするような者は1人も見かけなかった」。とはいえ、後にふれるように、江戸城内における西洋人に対する将軍、大奥をはじめとした人々の対応には、彼ら西洋人は絶好の好奇の対象にされていたことがよく表れている。ほとんどの人は、西洋人を見たことがなかったので、物珍しそうに見物した。人々のこうした反応は、日本のどこでも同じであった。

城内で将軍に謁見した時の様子がおもしろい。儀礼通りの挨拶がすんだあとの質疑応答をケンペルは、「それから先は、全くの茶番狂言で…噴飯的な質問であった」(6)、と書いている。さらにその後のやりとりは、西洋人がいかに日本人にとって珍しい人々であったかを証明している。「初めのうちはわれわれからかなり離れたところに坐り、婦人連に囲まれながらわれわれと対応していたが、やがて席を立ってわれわれのいる方に近寄り、御簾のすぐ後ろに坐り、われわれに対して、もっと顔が見えるように礼装のマントを脱いで正座するように命じた。…それだけに止まらず、何をやれ、かれをやれと俄には思い出せぬほど次々に注文が出され、われわれは命ぜられるままに猿芝居をやらざるを得なかった。…立ち上がってあちらへこちらへと歩いて見せたり、あるいは互いに挨拶を交わす形を演じたり、踊ったり跳ねたり、酔っぱらいの真似をしたり、片言の日本語を喋ったり、絵を描いて見せたり、オランダ語とドイツ語で朗読したり歌ったり、マントを着替えたり脱いだり、いろいろの仕種をして見せた。…ドイツの恋歌を1曲、私なりに歌った。…このようにして2時間も体のいい見せ物になった」(6)。

家老の屋敷に招かれても同様であった。「案内された部屋の襖や御簾の蔭には、われわれが余興に何か面白いことをするのではないかと、好奇心からわれわれを見物しようと隙見している婦人達が大勢いた」(6)。「どこの屋敷でもわれわれの方からは見えない物蔭から婦人達が覗けるように仕掛けがしてあり、…菓子や甘味を進めては、引きとめるように努めるのであった」(6)。江戸町奉行を訪ねたときには、「10人ないしは20人の警固の武士が、頑丈な杖棒を携え、厳しく正装して往来に立ち並び、押し寄せる群衆を制止していた。…部屋の奥の向こう側に、襖のかわりに数枚の御簾を垂れ、その蔭に化粧したこの家の婦人連や招かれた女性の知人が、立錐の余地なきほどぎっしり詰めかけ、あるいは坐りあるいは立っている様子が窺われた」(6)。

長崎奉行の家でも、「部屋（奥座敷）の両側に幅の広い御簾が懸けてあり、その蔭には今までの屋敷における以上に婦人達が犇めいており、…2度ももっと御簾の方に近寄ってもらいたいと頼まれた。婦人連は好奇心に燃えて、われわれの衣装や甲比丹の帯剣、指輪、喫煙パイプ等を行儀よく些細に観察し、ついにはそれらを全部、御簾の合せ目や下の隙間から中へ入れさせた」(6)。「ここでは（長崎奉行十兵衛宅）、少人数の婦人が、われわれの前方に閉められていた障子の蔭に集り、指をつつきあけた小さい孔を通してわれわれを覗き見していた」(6)。如何にも滑稽な情景であるが、生涯に1度でも目にすることが難しい西洋人、姿形も話す言葉も未知の人たちを前にして、好奇心を駆り立てられたのも無理のないところであろう。そこには、未知の人という意味での不安や恐怖などの感情はあったかもしれないが、日常の体験を通して作りあげられた反感や嫌悪などの否定的感情はなかったであろう。その点で、日常西洋人と接する人々の多かった長崎では、人々の西洋人に対するとらえ方は異なっていたかもしれない。女性や子供（日本人奴隷）のポルトガル商人との売買や、白人、黒人の関わる犯罪などもあり、日本の文化を基準に見た時に西洋人に対する否定的な感情が生じたかもしれない。

一方、西洋人に対する子どもの悪ふざけはありふれたものだった。「往来の子供衆が悪ふざけしてわいわい騒ぎ立てるので、敢えて一休みしたいとも思わない」(6)、「意地悪い悪童はどこにでもいるものであり、日本の町や村にもわれわれをシナ人と間違い、シナ人を馬鹿にするような調子の韻語か諺でわれわれを揶揄する者がないではない。例えば、「唐人、売買！」という。これは、われわれのところでユダヤ人をからかうようなもので、半ばシナ語調で「シナさん、うまい商売ないかね！」とからかう言葉なのである」(6)、とケンペルはいっている。子どもにしても大人にしても西洋人を高貴な人々と受けとめたり、彼らに対してあこがれを抱くことはなかったと言えよう。

3　無礼・傲慢な西洋人と恐怖の奴隷商人

ケンペル(6)は、ポルトガル人は日本に定着するに連れて傲慢になったと指摘する。「日本にやってきた当初は、要路の人々に対して一見謙虚に振舞って取り入ったが、事がうまく運ぶと地金を出して尊大になり」高慢な態度をとり、目にあまる存在になった。道で代官に遇った宣教師が、傲然と自分の乗り物を進めてはばからなかったことを例としてあげている。しかし、ケンペルがポルトガルと対立するオランダ人であったことを差し引いて考えなければならない。

日本と西洋の文化の違いが、両者の間に齟齬を生み出したことは、食事作法や立ち居振る舞いを例にとってみてもわかる。豊臣秀吉は、「牛馬は人間に仕へ有益なる動物であるに、何故これを食ふ如き道理に背いたことをなすか」と、宣教師に問い質している。「牛馬ヲ売買ころし食事、是又可為曲事事」「堅被停止畢、若違犯之族有之者、忽可被処厳科者也」(21)として、牛馬を食し、この禁令を犯すものには厳罰をもって対処した。当時の日本人には、肉食をする西洋人は恐ろしい禽獣のように映ったのであろう。

1587年（天正15年）6月、秀吉は九州を平定した後すぐにキリスト教の布教と上級武士の信仰を禁止し、宣教師の国外追放を命じた。しかし、民衆や一般武士のキリスト教信仰は認めた。貿易のためにポルトガル人の来日も歓迎していた。しかし、この頃民衆が奴隷として売られ、長崎地方が教会領になっているのをみて、厳しい処置をとった(11)。貿易商人を介して、日本人女性や子どもが奴隷同然に盛んに売買されていた。秀吉は日本人の売買について次のように問い質している(22)。「ポルトガル人が多数の日本人を買ひ、これを奴隷としてその国に連行くは何故であるか等の質問をなした」。司教は答えた。「ポルトガル人が日本人を買ふことは、日本人がこれを売るからであって、パードレ達はこれを大いに悲しんでおり、これを防止するためできるだけ尽くしたが、力が及ばなかった。各地の領主その他異教徒がこれを売るのであるが故、殿下が望まるれば、諸港の領主に日本人を売ることを止めるやう命じ、これに背く者を重刑に処せられたらば容易に停止することができるであらう」。天正15年6月18日、秀吉は人身売買を禁止した。

定

一　伴天連門徒之儀者、其者之心次第たるべき事。

……略……

一　大唐・南蛮・高麗江日本仁ヲ売遣候事曲事ニ付、日本ニ於て人之売買停止之事。

一　牛馬ヲ売買ころし食事、是又可為曲事事。

右の条々、堅被停止畢、若違犯之族有之者。忽可被処厳科者也。

少年遣欧使節のミゲルも日本人の海外への人身売買について語っている。「日本人には慾心と金銭への執着がはなはだしく、そのためたがいに身を売るようなことをして、日本の名にきわめて醜い汚れをかぶせているのを、ポルトガル人やヨーロッパ人はみな、不思議に思っているのである。そのうえ、われわれとしてもこのたびの旅行の先々で、売られている奴隷の境涯に落ちた日本人を親しく見たときには、道義をいっさい忘れて、血と言語とを同じうする同国人をさながら家畜か駄獣かのように、こんな安い値で手放すわが民族への義憤の激しい怒りに燃え立たざるを得なかった」(5)。マルチノもまたいう。「わが民族のあれほど多数の男女やら童男・童女が、世界中の、あれほどさまざまな地域へあんな安い値で攫って行かれて売り捌かれ、みじめな賤役に身を屈しているのを見て、憐憫の情を催すさない者があろうか。単にポルトガル人へ売られるだけではない。それだけならまだしも我慢ができる。というのはポルトガルの国民は奴隷に対して慈悲深くもあり親切でもあって、彼らにキリスト教の教条を教え込んでもくれるからだ。しかし日本人が贋の宗教を奉ずる劣等な諸民族がいる諸方の国に散らばって行って、そこで野蛮な、色の黒い人間の間で悲惨な

奴隷の境涯を忍ぶのはもとより、虚偽の迷妄をも吹き込まれるのを誰が平気で忍び得ようか」(5)。いかに多くの日本人男性・女性・男女児が海外に売り払われていたかがわかる。レオはこの原因は、ポルトガル人の強欲にあり、宣教師たちもこれをやめさせようとしていないことにもあると批判している。

これに対してミゲルは、ポルトガル人を次のように擁護している。「この点でポルトガル人はいささかの罪もない。何といっても商人のことだから、たとえ利益を見込んで日本人を買い取り、その後、インドや他の土地で彼らを売ってお金儲けをするからとて、彼らを責めるのは当たらない。とすれば、罪はすべて日本人にあるわけで、…実の子をわずかばかりの代価と引き替えに、母の懐から引き離されていくのを、あれほどこともなげに見ていられる人が悪い」(5)。パドレは人身売買に反対し、ポルトガル王に禁止を働きかけ、「日本に渡来する商人が日本人を奴隷として買うことを厳罰をもって禁止させることになった」といい、日本人奴隷売買の罪はひとえに日本人にある断じている。黒人やインドネシア人が奴隷として日本に来、日本人男性・女性や男女児は奴隷として逆に海外に送り出されていたのである。

4　まとめ

鎖国前後の日本人と外国人の交流をいくつかの面から整理し分析を試みた。豊臣秀吉は、インド副王の使節を迎えたとき、西洋の豪華絢爛たる品々に目を見張り、欣喜し、その後もヨーロッパとの交易を望んだ。しかし、総合的に見ると、16,17世紀頃の日本に渡航した西洋人は日本人に対して好ましい印象を与えていたとはいえない。彼等は、常に物珍しい好奇の対象ではあったが、日本人とは異なる形相をし、唾を吐き、室内をも土足で歩き回り、肉食をする、不躾、粗野で野蛮な人々、女性や子どもを海外に売り飛ばす恐ろしい人々と受けとめられることが多かった。一方、黒人に対する蔑視や否定的観念は、西洋人のもつ奴隷としての黒人観を受け入れる形で定着しつつあった。通商上の問題や軍事上の問題は、日本人と外国人の関係を考える上で重要な心理－歴史的背景要因であるが、鎖国体制がほころびるまでには至らなかった幕末以前にはまだ潜在的な影響要因に留まっていたと考えられる。

引用文献

1　新井白石　1724　西洋紀聞（宮崎道生校注 1968）平凡社
2　アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ 1583　日本巡察記（松田毅一他訳　1973　平凡社）
3　朝尾直弘　1975　日本の歴史　17巻　鎖国　小学館
4　坂西友秀　2002　西洋人と黒人に対する日本人の人種ステレオタイプの形成に関わる心理－歴史的背景　埼玉大学紀要　教育学部（教育科学Ⅰ）51(1)　1-20.
5　デ・サンデ　1590　天正遣欧使節記（泉井久之助他共訳　1969　新異国叢書５　雄松堂書店）
6　エンゲルベルト・ケンペル　日本誌上・下 1777－1779(今井正編訳　1989　霞ヶ関出版)
7　古川古松軒　1795　西遊雑記　巻之六（本庄榮治郎他共編　近世社會經濟叢書　第九巻 1927　改造社）
8　平戸オランダ商館の日記　１輯・2輯 1633-1641（永積洋子譯　1969　岩波書店）
9　平山武章　1969　鉄砲伝来記　八重岳書房
10　洞富雄　1939　鐵砲傳來記，白揚社
11　家永三郎編　1977　日本の歴史　律令体制の変動・下克上の時代　ほるぷ出版
12　児玉幸多・佐々木潤之介　1996　新版　資料による日本の歩み　近世編　吉川弘文館
13　古賀十二郎著・長崎学会編，長島正一校注 1965　丸山遊女と唐紅毛人　前編・後編　長崎文献社
14　松田毅一監訳　十六・十七世紀　イエズス会日本報告集　第１期第１巻　同朋舎出版
15　松田毅一監訳　十六・十七世紀　イエズス会日本報告集　第１期第２巻　同朋舎出版
16　松浦静山　1821（文政4年）－1827（文政10年）甲子夜話三十四（中村幸彦・中野三敏校訂　1977　平凡社）
17　メンデス・ピント　1614　東洋遍歴記１（岡村多希子訳　1979　平凡社）
18　メンデス・ピント　1614　東洋遍歴記２（岡村多希子訳　1979　平凡社）
19　森永種夫　1962　犯科帳－長崎奉行の記録－岩波書店
20　森永種夫　1963　流人と非人　岩波書店
21　村上直次郎訳　柳谷武夫編輯　1969　イエズス会　日本年報　上・下　雄松堂書店
22　永原慶二監修　1999　日本史辞典　岩波書店
23　長崎オランダ商館の日記　第一輯　1641（村上直次郎譯　1956　岩波書店）
24　長崎市立博物館編　2000　秘蔵カピタン江戸コレクション　長崎市立博物館
25　岡部狷介編　2000　史都平戸－年表と史談－松浦資料館
26　小瀬甫庵　1624（寛永初年）太閤記　上・下（桑田忠親校訂　1944　岩波書店）
27　高宮榮齋　1851（嘉永四年）　長崎不二賛巻二　（丹羽漢吉校注　1976　長崎土産・長崎不二賛・長崎萬歳　長崎文献社）
28　東京戸江戸東京博物館・ピーボディ・エセックス博物館編　1999　日米交流のあけぼの－黒船きたる－　東京都江戸東京博物館
29　前悪性大臣嶋原金捨　1681年（延宝９年）長崎土産　巻五（丹羽漢吉校注　1976　長崎土産・長崎不二賛・長崎萬歳　長崎文献社）

（2002年３月27日提出）
（2002年５月10日受理）

Psycho-Historical Background of Japanese Perspective on both Westerners and Blacks in the Era around National Isolation.

We conducted research on the interactions and relations between Japan and European countries from the 16th to 18th centuries by analyzing diaries, old writings, and old manuscripts with the following perspectives:

1. The Japanese perspective on both Westerners and Blacks before National Isolation.
2. The Japanese perspective on Blacks before National Isolation.
3. The Japanese perspective on both Westerners and Blacks during the Era of National Isolation.

Shogun Toyotomi Hideyoshi was very surprised and delighted to see the gorgeous parade of missionaries who were sent to Japan by the vice president of India in 1590 as the Portuguese delegation. In the late 16th Century, the Shogun banished foreign missionaries in order to eliminate their work in Japan, but he continued trade between Japan and Portugal. In general, foreign people who stayed in Japan in the 16th and 17th centuries tended to give a poor impression to Japanese citizens. The Japanese watched them everywhere as they were very different from the Japanese. They looked strange to the Japanese, spat even in the houses, walked in the houses with their boots on, ate beef, and did many other things that appeared strange to the Japanese. Most Japanese considered Westerners to be ill mannered and prudish because much of their conduct conflicted with Japanese culture. People living in Nagasaki, which was one of the most important port towns at that time, feared the foreign traders would buy Japanese women and children to sell as slaves to other Asian and Western countries. Blacks were regarded as slaves, and looked down on as inferior people by the Japanese. The people of the port town might already have had ethnic stereotypes toward Blacks in the 16th century. It was not until the end of the Edo era that problems concerning trade, military, and foreign affairs become important psycho-historical background factors influencing relations between Japanese and Westerners.

Key words; the late 16th Cntury, Westerners and Blacks, Japanese, psycho-historical background factors, ethnic stereotypes